

〈論文〉

接続詞「あと」「あとは」

桜井 隆

キーワード：あと、あとは、接続詞、累加、段落

0. はじめに

筆者は千葉県の某大学の授業で学生に作文を書かせたが、その中で、「あと」を接続詞として使っている文章をいくつか見た。次のような例である（プライバシーに関わると思われる固有名詞は伏せた。以下同じ）。

例1

私は高校三年生のときから数学をやっていないので、○○（授業科目）が特に大変です。○○では、やたらと小数が出てくるので四捨五入をしなければなりません。はっきりいって私は数学が嫌いなので、とても苦勞しています。あと大変な授業は、英語です。英語の先生はあまり日本語が上手ではなく、勝手に授業をすすめてしまうので訳がわからないことが多いです。また、課題をやっても見てくれないので何のためにやらされているのかわかりません。ですから英語の授業を受けるたびに、不満がたまっていきます。

（1年男子）

この例のように、「あと」を文章の中で接続詞として使うことには、いささか違和感もたれるかもしれない。小林（2004：123）は次のように言う。

メールで、口語とほとんど変わらぬ文章をつづっている若者にとって、「あと」は、次第に添加の接続詞と変じつつある。しかし、口語の勢いに流されるままにしないで、たまたま、自分の文章を総点検をしてほしい。

「あと」は、文章上では、いまだ、添加の接続詞ではない。レポートや卒業論文を書く際には、特に留意しよう。

たしかに規範文法の立場では、そのように言えるであろう。しかし現実には、「あと」が接続詞として使われている状況が続いている。使用に注意を促すだけでなく、接続詞としての「あと」をきちんと考察する必要があるだろう。

1. 先行研究

接続詞としての「あと」を中心に論じた論考は少ない。接続詞としての用法は正用でないという意識があり、研究に値するとは見なされないからであろうか。筆者の管見に入ったのは、内田（2000）と茂木（2006）のみであった。

1.1 内田（2000）

接続詞としての「あと」を初めて正面から論じたのは、筆者の知る限りでは、内田（2000）である。内田（2000：33）は「日本語学習者の中には会話だけでなく作文でも多用するものもあり…」としている。内田は日本語教育に携わっており、そのような使用例をしばしば実見したのであろう。もっとも、この論文の中で日本語学習者の使用例は掲げられていない。

調査の対象となっているのは、国語辞典での扱いである。23種の国語辞典を調べ、「あと」を「接続詞」としているのは『三省堂国語辞典』『三省堂現代新国語辞典』の2種、「接続詞的用法」をあげているのが『大辞泉』『集英社国語辞典』の2種のみである、と報告している。「国語辞典」の規範では、接続詞としての「あと」はほとんど認められていない、ということになる。

一方、『日本語能力試験の出題基準（外部公開用）』の「1・2級語彙表」に「あと [接]」が記載されており、「実際の能力試験の聴解問題にも過去何例か用例が見られる」として、次の例を掲げている。

例2

「じゃあ、来週会うことにしようよ。」

「いつにする。」

「ぼくは土日以外だったら、いつでもいいけど。」

「あたしも週末はちょっとね。あと火曜と金曜はちょっとだめなのよ。」

（92年1級）

日本語教育では、接続詞としての「あと」の使用は会話の中でなら認める、ということになるだろうか。

ただ、内田（2000：40）の結論は、「日常会話で頻繁に使われている以上……教育の場で提示すべきだと考える」と言うにとどまり、自ら使用例を集めて「あと」の接続詞用法について見解を述べるところまでは踏み込んでいない。

1.2 茂木 (2006)

茂木 (2006) は、「あと」に接続詞としての用法があることを初めから認め、その機能を分析している。

まず、「あと」は、名詞と名詞、文と文など、構造的に对称性をもつ要素を接続する、という。次のような例をあげている (p.142)。

例3

スーパーに行って、牛乳と卵と、あとネギを買ってきてね。

この「あと」の機能は基本的に累加であるとしているが、その中で、次のような例を踏まえての指摘には注目すべきであろう (p.136)。

例4

307C：昔はねー、雪、とにかく2メートルとかねー、ふるのが常識ってかんじで

308A：何でふらなくなったんでしょうねー

(中略)

311C：温暖化とか関係あるのかな

312A：あー、そうなんですか

313C：あるような無いような

314A：うーん

315C：あと稚内という所で

316A：という所で (笑い) 知ってます (笑い)

317C：／／というところで職業もって先生の仕事をしてた時に

318A：うん

319C：雪がね、下から上にふんのね

このとき話者Cは、保持したい先行の話題に関連する新たな発話を「あと」を用いて「累加」することにより、一旦逸れかけた話題を元に戻すことに成功している。

そして、次のように結論づける。

実際の会話における「あと」は、文レベルのように明確な形で要素を接続する (略) というよりも、発話のまとまりの切れ目に現れ、「付け足し」「場つなぎ」「話題の保持」といった働きを担っている。

ただ、その分析のもととなったのは、「実際の会話資料」のみである。飛田・浅田（1994：10）が接続詞「あと」を「かなりくだけた表現で、日常会話を中心に用いられる現代語用法」としているということに従い、「実際の会話資料」のみをもとに議論を進めているのである。

2. 文章中の接続詞「あと」

これまでの論考では、接続詞「あと」は会話中で使われると規定して、文章中の用法については、全く考察をしていない。学生がレポートなどで使用することがあっても、小林（2004：123）のように「文章上では、いまだ、添加の接続詞ではない」という規範意識のもとに、単純にその使用を否定するだけである。

しかし、「あと」が接続詞として使用されていることは、まぎれもない事実であり、その使用は増加しつつあるように思われる。

筆者の授業で学生が書いた次の作文の中の「あと」は、その典型的な用法を示している。

例5

私が頑張ったことが、今回のテーマですが、私の頑張ったことは色々あります。色々と言い始めると、沢山の事が頭の中をよぎります。自分は色々つまみぐいしてきたのだと思います。最近、大学にいる人と比べて、昔からやってきた整備関係のやってきて良かったと思います。整備とは、バイク、車です。プロの人には、負ける自信がありますが、車とかの整備、あとカスタムとかは出来る自信があります。自分では、車などをいじることが、頑張ったことだと思います。

あとは、入学試験です。今まで勉強したくなくて、大変だろうな、と始める前は思っていました。勉強を始めると、なんで今までやってこなかったのだろうと、過去の自分が嫌になりました。昔は気付かなかった発見が沢山見つかりました。

以上のことが、私が頑張ったことだと、自分で気付きました。

（1年男子）

ここには2種類の「あと」が見られる。最初の「あと」は、「整備」と「カスタム」という名詞、すなわち構造的に対称性をもった要素をつないでいる。2つ目の「あと」は、茂木（2004：142）の言うように、「発話のまとまりの切れ目」すなわち段落の初めに現れ、「付け足し」「場つなぎ」「話題の保持」といった働きを担っている。

3. 接続詞「あとは」

ところで、上記の例5の2つ目の用例は、「あとは」という語形である。茂木（2004：143）では、

「あとは」について次のように述べている。

名詞的用法には、「あとは」の形をとり、ある時点を基準としてそれ以降に残された事柄を表すものがある。

例 6

あとは寝るだけだ。

例 7

メモを置いておけば、あとは秘書が処理してくれる。

しかし、例5の「あとは」の機能は、これとは異なる。「は」を省略し、「あと」に置き換えても、例5での文意は変わらない。「あとは」は「あと」の自由変異形といえよう。しいて「あとは」という語形を使った理由を求めるなら、2行前で「あと」を使っているので、重複を避けるため、同じ機能をもつ変異形を使った、ということであろう。

このような、「あと」の自由変異形としての「あとは」は、他の学生の作文の中にも見つかった。

例 8

隣には〇〇市というのがあり、EXILEのATUSHIの出身地でもあります。中学生の時は生徒会をやっていて、優等生だったそうです。あとは、梅しゃんとつーちゃんも住んでいます。(1年男子)

例 9

最初が、授業の話^{ママ}をしようと思います。

最近うけている授業の話ですが、先生の話しを聞いていて、はっきりその場で理解出来ません。やはり、大学の授業は難しいなーと授業のたびに感じます。話しを一度で理解できないし、何度見ても理解出来なく、難しいと思います。

そのために、予習をする時間を作ったり、復習する時間を作ったりして、勉強をする時間を作りたいです。その場だけで理解できないのであれば、個人的に勉強する時間がやはり必要であるな、と思います。

後は、大学での授業中の私語とか、自分だけ使っている人を見る時です。後ろの方に座っていると、ゲームをしている人が見えたりして、同じ大学の学生として、なさけないなあ、と思います。

(1年男子)

例5・例8・例9の「あとは（後は）」は、いずれも「あと」の自由変異形と判断されよう。

4. 文章中に現れた接続詞「あと」

このような「あと」の用法は、学生の作文にのみ現れるもので、活字に印刷されるようなものではないのであろうか。実は、決して見つからないわけではない。

4.1 対称的要素の累加

コミック『じょしらく特別版壺』（2010）の帯に次のような文がある。

例10

演じるのは小野恵令奈（AKB48第2期メンバー）、あと後藤沙緒里（アニメ「さよなら絶望先生」加賀愛役など）。

読点の後に使うことのできる累加（または並列）の接続詞は限られている。「と」は使うことができない。「および」は、文法的には置き換え可能であるが、語感が固すぎる。ここで使えるのは、「それに」くらいであろうか。しかし、「AKB48第2期メンバー」の後ろに使う接続詞としては、軽やかな語感をもつ「あと」が最適の選択であろう。

4.2 段落の初め

「発話のまとまりの切れ目」すなわち段落の初めに現れ、「付け足し」「場つなぎ」「話題の保持」といった働きを担う「あと」は、大人の書いた文章の中にも見出すことができる。

たとえば、北村俊一『悪い先生』（1991：43-44）の中に用例がある。著者は執筆時「教職に就いて23年目」の公立高校教員である。ちなみに、本書が刊行されたのは1990年である。接続詞としての「あと」が使われていたのはかなり早い時期からだったということになる。

例11

職員室に顔パスで自由に入出入りしている業者は多い。

例えば、〇〇とか△△など教科書を販売している会社の営業マン。気がつけばいつの教務主任の脇にへばりつき、売り込みに余念がない。こちらの事情とすれば、内容に大きな改訂が施された場合以外は、同じ本で通したい。教科書を新しくすると、あらためて勉強し直さなければならないからね。ワンパターンのほうが楽でいいわけ。だから、営業マンたちはその数少ないトキを狙って、職員室に常駐しているわけだ。

あと、教材を扱っている会社もよく顔をだす。副教材の受注は、教科書に比べればずっと取りやすいだろう。毎年変える教師も少なくない。ボクもそうだ。歴史の授業で使う精選図

解とか地図帳とかね。それにしても体裁や大きさなどが違うくらいで中身にそれほど差はないんだが、それでも年ごとに別の会社のものを使うことにしている。

ここでの機能は「累加」であるとともに「話題の保持」である。「教科書を販売している営業マン」について述べ、話題がそちらに広がっていくが、「あと」と述べることにより「職員室に顔パスで出入りしている業者」はその他にもいる、と元の話題に戻している。

また、岩中祥史『札幌学』(2010: 198-199)にも、次の例がある。この本は新潮文庫の中の1冊であり、同書によれば、著者は「1950年生まれ。東京大学文学部卒。出版社勤務。著書に『名古屋の謎だぎゃあ(正・続)』『不思議の国の信州人』など多数。」ということである。

例12

ただ、ビールがおいしく飲めるにはほかにも条件がある。それは空気が乾燥していることである。では、札幌はどうなのか。札幌市の年間平均湿度を調べてみると68% (略)、で、これはほかの政令指定都市と大差ない。というか、むしろ高いほうだ。だが、これはもっぱら冬の雪のせいで、夏となると7月の平均気温が20.5℃、8月 = 22.0℃ (略)と、ほかの都市に比べ3~6℃は低い。そのうえ、梅雨がないこともあり、ことのほかカラッとしているように感じられる。

あと、飲む側ののどの状態もあるだろう。夏場、夜になってビアガーデンに行くのは都市生活者の大きな楽しみの一つだが、飲む前には一切、水分を口にしないという人も少なくないはずだ。のどが渴いていれば渴いているほどビールはおいしく飲めるのを体験的に知っているからである。

ここでの機能もまた、「累加」と「話題の保持」である。前の段落で、湿度や気温のことを述べ、話題が別の方向に移って行きそうになるが、「あと」と言うことにより、「ビールがおいしく飲める条件」という元の話題にもう一つの条件事項を加えているのである。

上記2例はいずれも軽い文体のエッセイであるが、このような文脈では、かなり以前から接続詞としての「あと」が使われているのである。その書き手は、一人は教師であり、もう一人はプロの文筆家である。「あと」を接続詞として使うのは、決して、言語規範に疎い若者ばかりではない。

5. 若者言葉

「若者ことば辞典」の類がいくつか刊行されているが(たとえば亀井(2003)・加藤(2005)など)、「あと」はどこにも採録されていない。この種の辞典の項目語の多くは、「流行語」に近いものである。また、米川(1998)は、若年層の日本語を言語研究としてきちんと論じているが、接続詞「あ

と」については言及していない。「ていうか」のようないかにも若者らしさを感じさせる接続詞については、メイナード（2009）が触れているが、同書でもやはり「あと」は考察の対象となっていない。

たしかに接続詞「あと」は、「若者言葉」という語感からは外れる。そこにあるのは、「いまだ正用ではない」という意識だけである。これを若者言葉の研究が取り上げなかったのは、適切な判断だったと言うべきであろう。

ただ、若者言葉の研究は、語彙レベルにとどまっている傾向がある。接続詞のような、統語論あるいは文章論・談話論に関わる論考は、あまり見られないようである。接続詞「あと」が若者言葉の研究で取り上げられないのは、この分野の研究自体の傾向によるためであるのかもしれない。

6. 「あと」の意味と機能

「あと」は、一般に軽い文体でなら使うことができる。あらたまった文章では違和感を持つが、それは文体上の差異のためであって、正用ではないということとは異なる。

文章中で使われる「あと」の機能として、第一に挙げられるものは、段落の頭で使い、話題を保持しつつ（あるいは元の話題に戻しつつ）、付け加える、ということであろう。手元にある用例の数が少ないので統計的に証明することはできないが、文章中では、この機能で使われる「あと」がもっとも多いと思われる。本稿で掲げた用例はほとんどこれである（例5・例8・例9・例11・例12）。また、例1は段落の中でつかわれているが、「あと」の個所で段落を変えてもいい、あるいは変えるべきだと思われる。

ちなみに、小林（2004：122）が否定しつつも掲げている用例もまた、この機能である。

例13

私はリベンジという言葉を使わないのですが、やっぱり、一浪した私の友達が「リベンジ」という言葉を使っていたのを思い出します。

あと、ラジオで一回クイズにやぶれた人が再び、同じクイズをやったとき、「リベンジ」という言葉を企画名として出していました。

次に、「あと」は「単純に付け加える」という機能をもつ。「〇〇さん、コメントをありがとうございました。あと、何か付け加えることはありませんか。」という場合である。また「対称的な要素の累加」という機能も、ここにまとめられよう。例3「スーパーに行って、牛乳と卵と、あとネギを買ってきてね。」という場合である。

「あと」はこのような文体的特徴と機能をもつ接続詞として、そろそろ確立していると見てもよいのではなかろうか。

7. 方言

本稿をまとめる最終段階に、井上史雄氏から、この種の「あと」は方言ではないかのご指摘をいただいた。氏のご教示によるものであるが、藤原（1996：228）は「青森県津軽西部」のものとして、「アド カル モノ ネー カ（それから〈このあと〉、買うものはないか?）」という用例を挙げ、次のように記している。

関東系のもの言いをする人々に、こうしたアトが出やすいありさまが見られる。——今やそれが、共通語的なものにもなってきたか。「それと、あと、何々が……。」などの言いかたが、しぜんにおこなわれている。人は、アトとの簡明な言いかたに、近よりやすいのではなかろうか。

ちなみに、ここでの品詞分類は副詞とされているが、機能から見て、接続詞にも分類できるであろう。

方言が若者の中で使われ、共通語化するというのは、しばしば見られることである。接続詞的機能をもつ方言の「あと」が、どのようにして「共通語的なものになってきたか」のか、その経緯が解明されなければならないが、「方言」という観点は考慮に入れるべきであろう。

接続詞としての「あと」が正用と見なされないのは、方言であるという意識が、どこかで働いているからかもしれない。

8. まとめ

「あと」は現在、接続詞としての用法が根づきつつある。辞書もそれを追認しつつある。内田（2000）が23種の国語辞典を調べたとき、「あと」を「接続詞」として掲げていたのは2種（『三省堂国語辞典』『三省堂現代新国語辞典』）、「接続詞的用法」としたのは2種（『大辞泉』『集英社国語辞典』）のみであった。その10年後（2010年）、筆者が同じ23種の国語辞典を調べたところ、『大辞林』（第三版2006）は新たに次のような記述を掲げていた。

副詞② 別の話題を追加するときに、文頭などに用いる語。「これで説明を終わりますが、
——何か質問がありますか」

品詞は副詞としているが、機能は接続詞に近いものである。その用例は口頭の発話である。

また、内田（2000）以後、新たに発刊された『明鏡国語辞典』（初版2002）には次のような記述がある。

[名] ⑧ 《口頭語で、接続詞的に》そのうえに。さらに。「——、何か補足することはありませんか」

品詞は名詞となっているが、「接続詞的に」と記してある。用例は『大辞林』（第三版2006）とほとんど同じである。

2つの辞書の用例はともに口頭語であるが、現在ではインターネットの発達により、口頭語と文章語の垣根が低くなっている。小林（2004：123）は「メールで、口語とほとんど変わらぬ文章をつづっている若者にとって……」と言っているが、これは若者だけの現象ではあるまい。書き手の年齢は不詳であるが、Amazonの「カスタマーレビュー」には、次のような例があった。

例14

『ニューエクスプレス・スペシャル ヨーロッパのおもしろ言語』（白水社）

録音状態はさまざまですが、私が大好きなヨーロッパ方面のことばたちが学べてうれしいです。

あと、「英語の～は、○○語で何と言いますか?」という質問文が収録されているので、とても役立つんじゃないかなと思いました。

こうしたところから、接続詞「あと」は、文章の中にますます浸透していくことであろう。やがて、より多くの辞書が「あと」を接続詞として採録することになる。最後に、辞書の項目の形式で、この「あと」を記述しておく。

あと（異型 あとは）[接続詞（累加）] 口頭語または軽い文体の文章で使われる。①《段落頭で》（話題を保持しつつ）付け加える「条件は……。あと……」②《文頭・読点の後で》（対称性をもつ）要素を付け加える「筆と硯、あと墨が必要だ」「あと、何か付け加えることはありませんか」

参考文献

- 内田みつ子（2001）『「あと」考——副詞の用法と接続詞の用法について』『明海大学別科10周年記念論集』明海大学別科日本語研修課程・編集委員会 pp.33-41
- 加藤主税（2005）『若者言葉事典』中部日本教育文化会
- 亀井肇（2003）『若者言葉事典』日本放送出版協会
- 小林千草（2004）「文章を書くために本当に大切なこと——体験的文章講座 10のレッスン」『国文学 解釈と教材の研究』49巻7号 學燈社 pp.114-128
- 飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- メイナード、泉子・K（2009）『ていうか、やっぱり日本語だよ。——会話に潜む日本人の気持ち』大修館
- 茂木俊伸（2006）「累加の接続詞『あと』をめぐって」『語文と教育』鳴門教育大学国語教育会 pp.144-132
- 米川明彦（1998）『若者語を科学する』明治書院
- 藤原与一（1996）『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—』東京堂出版

『大辞林』（第三版2006）

『明鏡国語辞典』（初版2002）

岩中祥史（2010）『札幌学』新潮文庫

北村俊一（1991）『悪い先生』データハウス

ヤス（漫画）・久米田康治（原作）（2010）『じょしらく特別版壺』講談社